

函館唯一の機能強化型 在宅療養支援病院として

私の暮らす函館市は人口約26万人の中核都市であり、高齢者比率は30%を超え、全国・全道と比較しても、非常に速いペースで超高齢社会化が進んでいる都市でもあります。そのなかにあつて、函館陵北病院は、昨年開院40年を迎えた104床の中規模病院です。2011年11月より本格的に（気になる患者さんへの往診は早い時期から行なっていました）が、函館で唯一の機能強化型在宅療養支援病院として、現在、医師6名、看護師6名、事務2名の体制で、約250名の患者さんの地域生活をサポートしています。

地域ニーズに寄り添って

当院の医師は、訪問診療だけではなく、外来や病棟の業務もしており、そのほかにも在宅支援当番や当直をこなすハードな仕事内容となっています。そのため、夜間・休日の臨時往診を最小限にするため、日中の看護師の対応が重要となります。患者さん、ご家族との頻繁なコミュニケーションを心がけ、病状などの変化時や不安の強いときは、「まず動くこと」を大事にして看護師訪問をするこ

とにつながっていると考えます。当然、医師のスタイルはそれぞれ異なります。担当看護師はそれぞれの医師のスタイルに合わせ診療をスムーズに進められた時間内では自分の思いを伝えられない方がいれば後日訪問し、患者さんご家族の思いを聞き、時には代弁するなど個々に合わせたサポートを常に心がけています。

訪問看護師と病院をつなぎたい 訪問診療同行 看護師のしごと

函館陵北病院訪問診療室主任
坂本雅美

なかなか外出する機会がない患者さんを外へ連れ出そうという思いから始まった年1回の遠足も、今年でちょうど10回目になります。久々の外出にムセもなくたくさん食べることができたり、できる事がたくさん見つかったりと本人の自信につながっている機会となっています。

また、病状的、体力的に遠足への参加が難しい方々には個別で出かけることも多いです。がん末期の方と競馬（函館名

物の1つです）に出かけたり、夕日（これまた函館名物）を観に出かけたりと、本人、ご家族の希望があればさまざまに企画しています。休日でも、食事が大変だという患者さんがあればおにぎりをくって持って行ったり、花屋の宅配が来ないと電話があれば花屋まで出向き自宅に届けたり、患者さんと一緒に歌ったり踊ったり、写真のように誕生日カードを作ったり……。

病気を一番に考えるのではなく、患者さんの大切にしているもの、生活を支えることを大切に、一緒に悩み、考え、笑って、泣いて、怒ってと患者さんの立場に立ち続けたいと考えています。

訪問看護師と病院をつなぐ コーディネーターでありたい

当院訪問診療室は、近隣都市の19事業所の訪問看護ステーションとやり取りさせていただいています。本誌をご覧になられてますでしょうか？ いつもお世話になっております！

私自身も、訪問看護で働いた経験があり、そのとき「自分には動まらない」と思い、病院へ戻った経緯がありました。在宅でいちばん必要とされるのはやはり訪問看護師であると考えます。

昼夜問わず、常に患者さんやご家族の思いに立ち返り、各自の知識、経験から奮闘されている訪問看護師さんには感謝しかありません。だからこそ、私たち訪

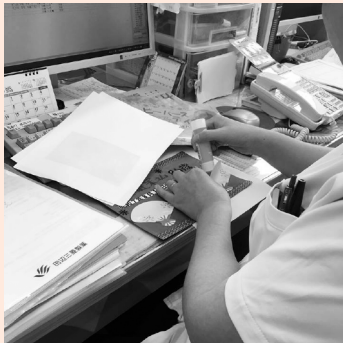


訪問診療室の仲間たち集合！



訪問診療室で往診同行準備中。

問診療同行看護師は、訪問看護師さんが困っていることなどを素早くキャッチし、主治医へ伝え調整していくコーディネー



患者さんのお誕生日カード作成中。

ターでありたいと思っています。
どんな薬よりも住み慣れた家の匂いや生活音が効く
 終末期の患者さんとの関わりは、慢性疾患の方と比較しても短期間となってしまう、その短期間のなかで患者さん、ご家族の思いを聞きながら信頼関係を築いていくことになります。
 マニュアルというものは存在しないので、個々の思い、揺れる思いに最期まで寄り添うことを大事にしています。
 病院の中心は治療であり、主役は医療者になりがちですが、在宅は生活の場であり私たちが「お邪魔させていただく立場となります」。
 どんな薬よりも住み慣れた家の匂いや生活音すべてが患者さんを元気にさせる何よりの薬となることを、毎日の訪問診療から実感しています。一方、配慮が足



血圧測定中の筆者。

りず、患者さんに逆に不安を与えてしまうなど結果的に無理難題を押し付けてしまったことで、とても反省したケースもありました。
「おせっかいな隣のおばちゃんであり続けたい
 私たち訪問診療同行看護師は、それぞれ専門性を持ち合わせ、さまざまな視点を持ちながら関わるチームの一員として、そして主治医のいちばん近くにいて、そして、家族を含めた患者さんの生活を支えていくおせっかいな隣のおばちゃんであり続けたいと思っています。
 病気はその方の一部分でしかありません。けっして病気だけを看るのではなく、病気とともに生きることを支え、その方の人生のものがたりと一緒に紡がせていただく伴走者としての役割を今後も続けていきたいと思っています。